

次世代を担い、農業の未来を拓いていく若手農業者。彼らとビジョンを共有し、夢を実現させようと奮闘するTAC。二人三脚、模索を続けながら生活者に思いを伝える姿をレポートする。

千葉県 JA長生

滋賀県 JAこうか

岩手県 JA新いわて

栃木県 JAしおのや

長崎県 JA島原雲仙



▼JA長生 TAC 長嶋紀幸(左) 若手農業者 芝崎徹也(左から2人目) 齋藤紘範(右から2人目) 植草晃(右) ①

▼TACと担い手の年齢も近く、気軽に話せることが功を奏している②

▼タブレット端末を使った情報提供③

地元の農業を盛り上げていく

「仲間と一緒に、地元・長生の農業を盛り上げていきたい」

JA長生管内にある長生村の芝崎徹也(34)は意気込む。Uターンで就農して6年、父親とともに水稻を栽培する傍ら、自ら長ネギ栽培に挑戦する。徐々に増えつつある若手農業者の中で、リーダー的存在として活躍している。

長生地区は、20数年前まで、年間70万㌔以上を出荷する全国でも有数の長ネギの大産地だった。しかし、高齢化による生産の減少やJA離れによって、出荷数量は大幅に落ち込んでいた。危機感を募らせたJAは、平成23年、「生産者の所得増大」を第一の目標に掲げ、対策に乗り出した。生産者の現在のニーズを把握するため、全戸訪問を実施。全農ちばや農業事務所と連携し、生産者全員参加型の「長生ネギの今後を考える会」を開催した。

そうした中、芝崎は「生産に集中できる環境を整えてほしい」とTACに要望。反収アップ・品質向上に向けた栽培指導はもとより、JAが販売面へ注力することが求められた。JAは、支所内に出荷・調製施設を試験的に設置・稼動。労力軽減を図るとともに、加工業務用ネギの販路拡大も見込み、ラーメンチェーンとの契約栽培も実現させた。

JAは遊休農地対策にも本格的に乗り出した。規模拡

大に意欲的な生産者や新規就農者の支援のために、JAが農地を借りて、効率的に手配できる仕組みを整備。「生産者の意欲はあるのに、肝心の土地がない」という状況を回避する。JA長生の農産園芸部次長の川城茂樹(53)はこれらの取り組みについて、「大事なことは、生産者の方々に、いかにやる気を持ってもらえるかだ」と言い切る。

「農業の可能性」を若い人に示す

芝崎らと切磋琢磨し、長ネギを栽培する齋藤紘範(28)は「生活者が本当においしいと思ってくれる品種を選定したい」と要望する。担当して2年になるTACの長嶋紀幸

(24)は、各メーカーから有望な種子を取り寄せ、提供する。生産者から頼りにされる手応えを感じている。

地域に盛り上がりが出てきた。管内の出荷数量も、現在年間20万㌔から、3年後には40万㌔の倍増を目論む。長ネギ栽培を一度は断念した植草晃(37)は、仲間の大事さを語る。「同世代なのでわからないことを気軽に聞けるのは有り難い」。芝崎らに支えられ、再び取り組むことを決めた。

「僕らの姿を見て『農業やってみようかな』と思う若い人が、一人でも増えてほしい」と芝崎は語る。この強い思いが、大産地の復活に大きな希望を与えることになるだろう。(敬称略)



TAC(タック)とは、
『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276 www.zennoh.or.jp

全農